総評文学賞受賞作品集

総評教宣局編

総評文学賞受賞作品集

発　行　1979年12月18日　初版
　　1980年２月25日　再版

編　者　総評教宣局編

発行者　武内辰郎

発行所　㈱オリジン出版センター
東京都新宿区岩戸町16　メジャー神楽坂402
電話（03）260－0453・267－8697
振替東京０－44705

印　刷　㈲三秀社

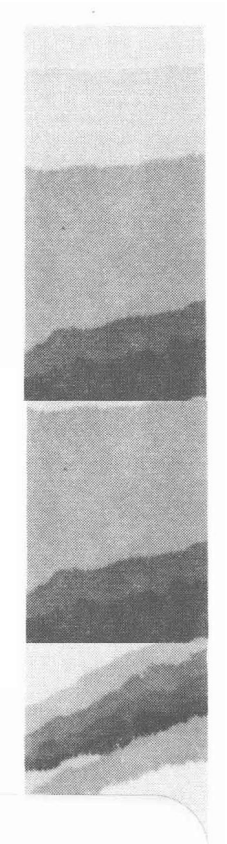
装　幀　熊谷博人

定　価　1500円

落丁本・乱丁本はお取替します。

総評文学賞受賞作品集

総評教宣局編



刊行にあたって

総評教宣局長　田口　典夫

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

〝総評文学賞受賞作品集〟の第二集が、オリジン出版センターの武内さんのご尽力で刊行できた。

第一回の総評文学賞が一九六四年。本年度は第一六回総評文学賞が、小説・詩・ルポルタージュの三部門に与えられた。

総評文学賞は、毎日労働の現場で働いている労働者で、文学を心がけている人たちの作品の優秀なものに与えられている。

労働者文学をめざす労働者の人たちの眼は「作家」の眼である。作家の眼で労働組合運動を見、作家の眼で労務管理を見、作家の眼で職場を見、作家の眼で職場の仲間をみる労働者がたくさんいることは、実にすばらしいことにちがいない。

一九五三年一一月に発刊された『岩波講座　文学』は、刊行のことばのなかで、つぎのように述べている。「文学が、国民の一部だけのものであった時代は過ぎた。いまこそ、文学は国民全体のものとなるべきである。国民はみずからの文学をもつべきである」と。総評文学賞も、文学を国民全体のものとなるべき場所の一角に位置づけてよいものだろうと思う。

総評文学賞は、労働者文学を志す人たちにとって一つの目標であり、大きな励しにちがいない。いわゆる文壇作家の芥川賞や直木賞のように有名ではないので、総評文学賞作品が、広く人口膾炙することはない。しかし、総評文学賞の作品の質や水準が他と比べて決して遜色あるものではないという。

総評文学賞に対する注目や関心が、国民全体のものとなっていくためには、まず、労働組合や労働者全体のものになっているという実感が欲しい。

近代文明のクレバスが年とともに奈落への暗部を大きく広げているとき、労働組合運動の機能も、「くらしの質」の全面的問い直しの姿勢を伴ないながら、経済重点主義から、人間主義への対応を求められている。

そんなとき、労働者文学を志す人たちが、より一層労働組合運動への参加の広場に圧し出て、発言を強める機会は、もっと大きくなってこなければならないだろう。

総評文学賞は、たんに労働組合運動の特別の関係者や、労働者文学に集う一群のサロンの人たちに読まれるだけで

はいけない。一般の市民の人たちのなかで、労働者の文学された世界のあり様に、共通の情念を感じとってもらわねばならない。

そのために、総評文学賞は、総評に加盟する労働組合を中心にした労働者文学サークルの作品を対象にしているだけでは十分でない。いま、総評は、国民にむかって「開かれた総評」をめざしている。

総評文学賞を、日本のすべての労働者を対象にした、労働者文学の最高峰にしていかねばならないと思う。出稼ぎや土工の記録などといった層へも開かれた文学賞として、この総評文学賞が、永く労働組合運動の文化活動のなかに息づいていかねばならないのである。

（一九七九年一〇月）

総評文学賞受賞作品集　目次

刊行にあたって……田口典夫 3

I 小説の部

深夜の形相……波佐間義之 12
石の城……星山夏 31
表彰……石川洋 58
振子電車……武居孝男 71
静かな駅……渡辺昭一 85
芝生焼打委員会……綱田紀美子 102
深夜勤務……村松孝明 136
どんころ糞……岩崎宏文 159
少年坑夫記——或る労働者の回想(1)……津脇喜代男 175

II 詩の部

米……小坂太郎 208
かげ・枕木と……まつうらまさお 212

日常……浅井薫 218
おいつめる……いしつかこうそう 220
午後の陽……山岸重治 226
落ち葉……和田攻 228
マムシじょんから……島田勇 229
もっそう祭・惣田正月十七日講由来……金田久璋 231
雨中の急行・圧殺他……松本恭輔 233
バッタ舞いあがる……北野純 239

Ⅲ ルポルタージュの部

ひよ子の家……柿田悠 244
——ある無認可保育室での一年
ろう城九十数時間……篠原貞治 262
——七四スト権奪闘の記録
痛々しき青春たち……小谷章 278
——頸肩腕症候群、その痛みの集録
春まで、あと……藤長重郎 288
解説・たがいに、隣り同士を知りあうことについて……久保田正文 307

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I　小説の部

深夜の形相……波佐間義之
石の城……星山　夏
表　彰……石川　洋
振子電車……武居　孝男
静かな駅……渡辺　昭一
芝生焼打委員会……綱田紀美子
深夜勤務……村松　孝明
どんころ糞……岩崎　宏文
少年坑夫記……津脇喜代男

深夜の形相

波佐間義之

温度計の目盛りを見ると、白い横の線をはるかにこえている。ぼくは、体を後にひねって、さらに正確な値をよむ。五十六度Cだ。つまり、生体活動温度圏を十六度Cオーバーしていることになる。ぼくは、作業シャツのポケットからボールペンを抜きとると、午前0時——56°C、とクレーン運転室のドアに貼られている測定表に書きこんだ。二時間おきに記録しなければならない。病院健康管理課からの要請によるものだ。昼間に比べると、夜間はいく分低くなる。外気のせいだ。それでも、五十六度Cは体にこたえる。首を振り続けている扇風機の風が、一定方向に集中するように、ぼくはイボを押して調整する。椅子にすわっているぼくの、ちょうど斜め下から吹きあげてくる格好になる。作られる風は熱風だ。熱風でも、廻していた方が気持は落ちつく。すでに、ぼくの体皮にはベトベトとした汗はない。乾いてしまうので、ざらざらとした塩だけが残っている。時々、ぼくは、その塩を指でつまんでなめる。唾液の分泌さえ容易でない口の中には、うってつけの刺激剤だ。塩は全身にできる。ぼくがなめるのはたいてい耳朶にできた塩である。他の部分でできた塩とは味がちがう。ニガ味がない。どういうわけか知らない。ぼくの舌が、いつの間にかそれを覚えてしまった。

最初、ぼくはクレーン運転室に魔法ビンにつめた冷水を持って乗務することを考えたが、意志の弱いぼくには不向きだった。せめて、ウガイだけにとどまればよいのだが、すぐのんでしまうのだ。のむ時はいいが、のんだ後の倦怠感はみじめなものだ。信じられないほどの速度で、ぼくの気力を喪失させ、不快さをつめこんでくれる。水と塩は高熱作業にたずさわる者にかぎらず不可欠のものだが、生理的分量をあやまると、体力の消耗をやたらと早めてしまう。だから、ぼくは作業始めと休憩時間、それに作業終了時にそれぞれコップ一杯の食塩水をのむだけにしている。それ以外はとらない。とってはいけないのだ。一度だけ、ぼく

は軽い熱中症に苛まれたことがある。正確には熱痙攣だ。クレーンをとめ、注油に運転室を離れようとしたところ、急に目の前が暗くなって意識を失なった。僅か十分間ぐらいだったと思うが、ぼくは運転室から運び出され、冷房のある休憩室に寝かされていた。入社してやっとクレーンの運転免許をとったばかりの頃だ。冷水ばかりのみすぎたせいである。以後、ぼくは衛生管理者から厳重な注意を与えられ、その種の失敗はない。始め、それは苦しいものだったが、しかし体はしだいに順応していくようになり、やがてそれが自分に一番ふさわしい方法だということを納得したのだ。むろん、これは体質的な個人差はあり、ぼく以外のクレーンマンが皆んな同じ方法をとっているとはかぎらない。が、大差はない。

ぼくは、大きな溜め息をもらして前方の合図方を見る。今晩の合図方は時枝君だ。彼はヘルメットの下にタオルで頬被りしている。目だけしか出ていないわけだが、背が高いので彼だということはすぐわかる。直径一メートルの四枚羽の扇風機の前に、体をよろめかせながら立っている。風の方向にまともに顔を向けると、息はできない。後向きに突っ張っている。その彼のすぐ側に圧延工場からロールガングで移送されてくる赤い未熟のレールが、三つある棚に五本一組の割合でそれぞれ押しこまれており、さらに一番棚には二列めが並び始めている。鋼塊がよく焼けると圧延ロールのピッチは早くなる。したがって移送ピッチもあがる。ぼくは、運転時の姿勢をとってコントローラーのハンドルを握る。ハンドルは三つだ。三つのうちの二つを常時握っている。交互に握りかえる場合もある。二つの手で三つのハンドルを同時に使う時もある。その時の状況によってちがう。が、二つは必ず握っている。コントローラーのスパーク防止用の安全カバーが熱をおびていて、その部分に触れる膝の内側が、ヒリッと傷む。作業ズボンの上からそう感じるのだから、直接皮膚に接触しようものなら赤い痣になる。五十六度Cプラススパーク熱だ。気をつけなければならない。ぼくは、トラベル右よし、と安全呼称をして徐々にクレーンを動かした。そろそろ、時枝君の白い旗があがる筈なのだ。

熱風が、勢いよく3.3平方メートルの運転室に舞いこんでくる。タールのこげた匂いが、狭い運転室を充塡した。ロールガングにのったレールが、ハッカースリップで棚に押しこまれる時の、スキットとの摩擦抵抗を少なくするためにタールはぬられる。ぬり方は下請工だ。棒の先端にボロ布を巻きつけ、それにタールを含ませてスキットにぬっていくやり方だ。ぬられたタールが、レール熱と直に触れるため、くすぶっている。ぼくは、クシャミをたて続けに三

回した。タールの煙にはなれている。鼻毛がよく伸びるのはそのせいだ。特別に手をほどこす必要はない。

――一号クレーンさん、装入ピットはNo.12にお願いします。No.12の次はNo.11ですよ。それがすんだら、また不熱です。鋼塊が焼けていません。不熱の鐘が打たれたらメシ食って下さい。以上――

――不熱、メシですか。了解――

キャリアホンが言う。工程管理室からの指令である。順調にいけば1ピットで五十分の所要だから、2ピットで一時間四十分の計算になる。ぼくは腕時計をのぞく。現在の指針に一時間四十分を加算する。すると、休憩は二時前になる。夜食は冷やむぎだ。ぼくは、工程管理室へ向けてキャリアホンのマイクを握り、食当番のオヤジに製氷庫から氷を運んでおいてくれるように連絡を頼んだ。気のない返辞がスピーカーから出た。

合図方の時枝君が、自分の背丈ほどある白銀温度計の細い棒を、あづき色に冷えかけた二十五メートルレールの中心付近に差しこみ、目盛りを読んでいる。防熱ガラスをヘルメットの先端に取りつけて目を保護してはいるが、落ちついて目を開けてはいられない様子だ。圧延ロールに嚙まれる時、千五百度Cあったレールは、棚で空冷され七百度Cに落ちる。その七百度Cに落ちたレールをぼくの乗務するマグネットクレーンで吊り、24あるピットの中に装入していく。七百度Cからピットの中の徐冷になるわけだ。まもなく、時枝君の白い旗があがった。適温の合図だ。ぼくは、クロースを前方へすべらせる。二十メートルの横天秤の下にマグネットは等間隔に四つ並んでいる。80×120（センチメートル）の一つが二トン半の重量だから、合計すると十トンになる。クレーンの定格荷重が二十トンだから、その半分をマグネットにとられることになる。時枝君の手が、マグネットを五本のレール幅の上に誘導する。マグネットが振れてはダメだ。レール幅とマグネット幅は殆んど同じだ。合図方との呼吸がうまく合わないと作業は捗らない。緊張する一瞬だ。時枝君が四つのマグネットを確かめる。マグネットは静止した。うまくいった。ピピピーッと時枝君が笛を吹く。三つはマグネット下げろの合図だ。ぼくは、ホイストを「下げ」に投入する。スパークが出た。気にしてはいけない。四つのマグネットは、まるで定規ではかったように五本のレールの頭部にのしかかる。時枝君が大きくうなづく。心がみなぎる。次の瞬間、時枝君はぼくに体を向け、ウェス手袋でかくした両手をパタパタと合わせる。マグネット吸着の合図だ。ぼくは、スイッチレバーを引く。バシッとレールを吸引する手応えがかえってくる。さあ捲け、の笛の合図が短く二つ鳴る。ぼくは、確認

しながら、ゆっくりとホイストを「捲き」に入れる。吸着部分に異常はない。もし、捲きあげてしまってからレールがマグネットを離れて落ちるようなことになれば大変だ。落ちたレールは曲ったうえに疵がつき、ペケ製品になる。屑鉄行きだ。気を使う。ぼくは、リミットいっぱいにホイストを捲きあげると、静かにクロースを引く。荷重のかかった時のクロースは重い。クロースをピットコースに合わせるとトラベルだ。最大分速は160メートル。人間が軽く走っている速度だ。装入中のピットには赤い旗が立てられる。そこをめがけてぼくはクレーンを走らせる。ピットから運転室の高さは七メートルだ。装入してまだ時間の経たないピットの換気孔から吹きあげる熱風は、七メートルのその距離ぐらいものともせずにぼくを攻めあげる。ものすごい上昇力なのだ。その都度、目がかすれてくる。五十六度Cよりもこの方がぼくにはこたえる。目を閉じるわけにはいかない。ぼくは、ハンドルを入れたまま、片手で目をこすった。コロコロとする。涙腺の分泌量が不足している。乾燥風が奪うので間に合わないのだ。ぼくの両目は、たぶん充血していると思う。こういう場合に混銑炉から飛散してくる鉄粉が舞いこんでくるなら、確実に眼球を傷つける。だから、ぼくはいつも会社から高熱作業者にだけ支給される赤いビタミン錠剤といっしょに、目薬を用意している。目薬は市販のものだ。会社からの支給はない。せいぜい、休憩室に洗眼器具が備えられているだけだ。目に異物が混入したからといって、クレーンを停めるわけにはいかない。クレーンを停めることは圧延を停めることになる。十分間停めると百五十万円の損失だ。給料総額のほぼ二十パーセントを占めている能率給が大幅ダウンになる。機械の故障は不可抗力であっても、人間のそれは不可抗力ではない。体に異常が生じた時は、早めに申し出ろと作業長はいう。が、交代要員はいない。作業長が乗務するつもりなのだろう。それならそれでいい。しかし、突発的に生じた異常に対する処置はどうなるのか、そこまでは申し受けていない。二人が交代で乗務している時はそんな心配はなかった。一時間乗っていれば次の一時間は休憩できた。今はちがう。二人が一人に減った。ビタミン錠剤支給とひきかえにそうなったのだ。むろん、職場で要求した運転室の冷房完備は黙殺されたままだ。冷房機を取りつければ、直流二四〇ボルトの電圧がドロップするという理由だ。電圧をあげるには設備の改造からやらなければならない。莫大な費用を要する。取りつけてやりたいが、やれないというのだ。無期延期だった。作業量だけが倍増したのでは片手落ちだ。そこで、そのみかえりとしてビタミン錠剤の支給と、夏季の暑熱手当が暫定処置として月額千円が給与に含まれるよう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com